

幼児期の向社会的行動と友だち関係との関連： ピア・オブザベーション法邦訳版を使用した検討

The relationship between children's prosocial behaviors and their friendship in the preschool years: Using the Japanese version of peer observation procedure

酒井 厚 松本 聡子*
Atsushi SAKAI Satoko MATSUMOTO

目 的

幼児期の仲間関係の良好さは、子どもの社会性の発達(Hartup, 1996)やその後の社会的適応(Morison & Masten, 1991)に関わる重要な要因である。子どもの仲間関係でのやりとりは、2歳頃からすでに個人差が見られるという報告(Browell & Brown, 1992)があり、近年では、低年齢における仲間関係の発達の様子を評価し、それに関わる要因や社会性との関連についての検討が行われてきている(NICHD Early Child Care Research Network, 2001)。

当該分野におけるわが国の研究では、就学前の子どもの仲間関係を実験や自然観察の手法を用いて評価したものが多く。例えば、丸山(1999)は、仲間とのいざこざが起きる物語の書かれた図版を子どもに見せ、その主人公であればどうするかを尋ねる実験を行い、対処方略が加齢に伴い非言語的・他者依存の方略から言語的主張・自律の方略へと質的に変化することを示した。また、関・松永(2005)は、自然観察のエピソードからボトムアップ的に行動カテゴリーを作成し、観察で評価された子どもの向社会的行動と担任教諭の評定による自己制御機能との関連を見出している。こうした実験や自然観察という方法には、仲間関係でのやりとりを評価する上で次のような長短がある。実験手法を用いた研究の場合は、測定する内容が明確であり条件が統制されているため結果に客観性を求めることができるが、現実場面での再現可能性を考慮する必要がある。一方、自然観察法では、現実場面で生起する行動から多側面的に評価することができるが、観察状況や観察者のスキルによって結果が左右され客観性を求めることが難しい。

こうした子どもの仲間関係の評価に関する実験と自然観察の特徴を活かした方法として、生態学的ピア・オブザベーション観察法(NICHD [アメリカ国立小児保健・人間発達研究所], 以降はピア・オブザベーション法と略記)がある。この観察法では、構造化された実験状況における幼児2人の遊びのやりとりを観察し、子どもの仲間関係におけるスキルや自己統制性、攻撃性といったポジティブ・ネガティブの両側面の社会的行動を複数のカテゴリーから評価することができる。また、米国における約600名の3歳児を対象とした研究(NICHD Early Child Care Research Network, 2001)からは、この観察法を用いた子どもの向社会的および攻撃的行動の評価と、母親と保育士による自記入式尺度での評価との間に有意な相関が示され、妥当性が検証されている。今回は、わが国でこれまで使用されていないピア・オブザベーション法の邦訳版を作成することを第1の目的とし、観察で見られた子どもの性差の特徴について報告する。

さて、子どもの仲間関係でのやりとりが向社会的な方向へと発達していくためには、養育者などの大人からの働きかけ(Maccoby & Martin, 1983)とともに、普段の友だち関係での経験が重要である

*お茶の水女子大学

と考えられる。とくに、就学前後における子ども同士のやりとりの質は、複数の仲間との安定した関係性の中で洗練されていくものであり (Howes, 1983)、就学前から良い関係を継続している仲間の存在が、小学校に入学してからの新奇場面での対処スキルの高さや適応に関わると報告されている (Ladd & Price, 1987)。つまり、たんに仲間が複数いるというばかりでなく、継続的で安定した関係性に基づく友だちの存在が、子どもの向社会的行動の発達に関わることが予想される。本研究ではこうした点を鑑み、第2の目的として、ピア・オブザベーション法を用いて評価した行動が、子どもが普段遊ぶ仲間数や親しい友だちの有無とどのように関連するかについて検討する。

方 法

対象者

山梨県内の幼稚園に通う 3～4 歳の年少児 36 名と年中児 4 名 (男子 20 名、女子 20 名) を対象に、2010 年の 2 月から 3 月上旬の 2 日間を利用してピア・オブザベーション法を実施した。また、対象児一人ひとりの友だち関係の項目については、3 名の担当教諭 (勤続年数は 9～23 年) に回答を依頼した。

調査内容

仲間関係に関する生態学的観察 (ピア・オブザベーション法)

①観察の手続き

ピア・オブザベーション法の進行と行動評定の定義が書かれた観察方法マニュアル (NICHD, 1993) を翻訳の専門家によって邦訳し、発達心理学を専門とし英語に精通する研究者が校閲して日本語版マニュアルを作成した。観察は、発達心理学を専門とする研究者 2 名 (第 1 著者および第 2 著者) が、このマニュアルに基づく観察方法のトレーニングを受けた発達心理学を専攻する大学院生 2 名のサポートのもとに、園の自由保育時間を利用して実施した。また、観察は、幼稚園の体育館と園内で最も大きい教室の 2 ヶ所に下記の仮設プレイルームを設置して実施した。

ピア・オブザベーション法は、ダンボール製の移動式仮設プレイルームにおいて、幼児 2 人 1 組が 3 つの玩具で遊ぶ様子をビデオカメラで撮影し、幼児の行動を複数のカテゴリーから評定するものである。プレイルームは、幅 4 cm の特製ダンボールをコの字型に組み立て、高さ 90cm、横 150cm、奥行き 90cm の長方形のスペースを作り (天井はなし)、内部にフロアマットを敷いて作成した。コの字型の空いている面 (150cm) は、プレイルーム内への入り口として黒い布を使用して覆い、撮影に使用するビデオカメラは幼児がなるべく気にならないようにプレイルームの外に設置し、黒い布の隙間からカメラレンズだけを挿入した。

観察は、観察者が最初に幼児ペアと一緒にプレイルームに入り、フロアマットの上に布 (入口) の方を見て座るように指示し、子どもたちが少し落ち着くのを待ってから開始した。観察者は、最初の玩具である「磁石で絵が描けるお絵かきボード」を 2 人の幼児の間に置き、合図があるまでこの玩具で遊ぶように伝えて退出し、その後は指定の時間までカメラで様子を伺った。4 分の経過後、観察者は次の玩具 (ままごとセット) を持ってプレイルームに入り、玩具を交換し、先ほどと同じように合図があるまでこの玩具で遊ぶように伝えて退出した。こうした一連の手続きによって、幼児ペアは 1 回目の「お絵かきボード」では 4 分、2 回目の「おままごとセット」では 5 分、3 回目の「懐中電灯」では 3 分の間、プレイルーム内で自由に遊び、全てを終了後に退出した。どの玩具についても幼児に渡す際に遊び方は教えなかった。また、「懐中電灯」の遊びでは、ランダムに選んだ一人に点灯するものを、もう一人には最初から点灯しないものを渡した。

原版のピア・オブザベーションでは、ペアを組んだ 2 人のうち 1 人を対象児とみなし、もう一人 (以下はピアと呼ぶ) との関係性を評価する。また、ピアの条件は①月齢が 30～48 ヶ月で同性、②2 週間以上の面識はあるがそれほど親しい間柄ではない、③きょうだいや同居中ではない子どもとされる。今回は、実験時間や対象児数の制約があるなかで最大限のデータ数を確保するため、「懐中電灯」場面

以外ではペアを組んだ両者を対象児とみなして評定した。また、ペアの選定は幼稚園教諭に依頼し、月齢が近く普段の幼稚園生活の様子から条件に合う子ども同士で作成してもらった。

②観察カテゴリーの評価

観察カテゴリーは、幼児の向社会的な行動を評価する13項目と全体的評価に関する3項目で構成された。行動カテゴリーの各項目の内容を表1に示す。これらの項目のなかで、「挑発への反応」と「社会的課題解決」以外は、観察中に見られた行動の頻度と質の高さから1点（なし/低い）、3点（中程度）、5点（高い）の3段階で評価した。また、「社会的遊びの複雑性」に関しては「社会的遊びなし」から「複雑な社会のごっこ遊び」までの5段階で評価し、得点が高いほどその行動傾向が強いことを表わすようにした。「挑発への反応」は、ピアから玩具を取られそうになる状況での対象児の行動を、「挑発なし（0）」、「物理的・攻撃的攻撃（1）」、「受動的で抵抗なし（2）」、「抵抗するが取られる（3）」、「玩具を渡さず、挑発は無視して遊び続ける（4）」、「ピアにルールや条件を提示して、ピアもいずれ使えるような約束のもとで玩具を取られないように守り続ける（5）」、「ピアと一緒に玩具を使うように前向きな対応をする（6）」の6つの基準から評価した。「社会的課題解決」は、対象児がピアの持っているおもちゃを手にするための手段を「非建設的：駄々をこねるなど（1）」、「力の主張：物理的行動や自分本位な主張に基づく行為（2）」、「社会的操作：ピアの注意をそらしてその隙に取り上げるなど賢い行為（3）」、「所有権の認識：ていねいに頼むかルールを主張する（4）」、「交渉：二人で公平性のルールを決めるか二人同時に遊べる方法を考える（5）」、「努力なし：玩具を取ろうとしない（0）」の6つの基準で評価した。

全体的評価は、「対象児とピアの人間関係」、「対象児の居心地」、「コード化担当者のピアへの反応」の3つのカテゴリーから構成された。対象児とピアの人間関係は、セッションの全体的な感じを評価する内容であり、敵対的で一緒に過ごすのが楽しそうではないレベル（1点）から、暖かいやりとりが多く調和的なレベル（4点）の4段階で評定された。対象児の居心地では、対象児が実験状況に恐怖や不安を感じず居心地良く遊んでいる程度を、コード化担当者のピアへの反応では、観察者に3歳の子どもがいた場合にその子を実験に参加したピアと遊ばせたいと思う程度を、それぞれ低い（1点）、中程度（3点）、高い（5点）の3段階で評価した。2名の観察者間の評定一致率（ランダムに選んだ8名の対象児の全カテゴリーを評定した結果の相関）は、 $r=.68$ であった。

2) 子どもの友だち関係

子どもの普段の友だち数と親しい友だちの有無について、担任の幼稚園教諭に回答を求めた。友だち数については、子どもが普段一緒に遊ぶ友だち（質問では“仲の良い”お友だちと表現）の人数に

表1 ピア・オブザベーション法による社会的行動カテゴリー

カテゴリー名	内 容
肯定的な社会的相互作用への関与度	ピアへの関心、肯定的感情の共有
向社会的行動Ⅰ	分かち合う、遊ぶ順番を積極的に譲る、協力して遊び
向社会的行動Ⅱ	思いやりや心配りを示す、ピアを慰める、ピアを褒める
自己主張とコントロール	遊びの時間をコントロールする、ピアの活動を指示する
挑発への反応	ピアが取り上げようとするのに抵抗する、協調的な解決策の提案
道具的攻撃	玩具を奪う、ピアが玩具を使うのを妨害する
敵意のある攻撃	物理的・言語的に明確な目的もなくピアの活動を妨害する
言語的相互作用	発話の量と明確さ、ピアとのコミュニケーションの有効性
肯定的気分	笑顔、笑い、肯定的な声色、熱意の表出
否定的気分	不満、退屈、怒り、敵意
空想/ごっこ遊び/創造的遊び	空想、ロールプレイ、玩具の創造的な使用
社会的遊びの複雑性	ピアとの相互作用
社会的課題解決	対象児がピアの持っている玩具と一緒に遊ぶ手段

ついて、決まったお友だちはまだいない (1 点) から 10 人以上 (7 点) までの 7 件法で回答を求めた。友だち関係の親しさに関しては、担任教諭から見て他と比べて特に親しくしている友だち (質問では“特別に仲の良い” お友だちと表現) の有無を尋ねた。

結 果

各観察カテゴリー評定における性差に関する検討

表 2 は、ピア・オブザベーション法の各カテゴリーにおける対象児の評価得点の分布を性別ごとに集計したものである。玩具の異なる場面ごとに各カテゴリー評定得点の性差を χ^2 検定で検討したところ、行動カテゴリーに関しては、お絵かきボード場面において敵意のある攻撃 ($\chi^2(2)=7.76, p<.05$) で有意差が見られ、残差分析の結果から女子の方が男子に比べて中程度と評価された子どもが有意に多く、男子の方にないと評価された子どもが多かった。ままごと場面では、向社会的行動 I ($\chi^2(2)=6.74, p<.05$)、自己主張とコントロール ($\chi^2(2)=8.40, p<.05$)、言語的相互作用 ($\chi^2(2)=6.60, p<.05$)、空想/ごっこ遊び/創造的遊び ($\chi^2(2)=9.54, p<.01$)、社会的遊びの複雑性 ($\chi^2(4)=14.77, p<.01$) の各項目で有意差が見られた。残差分析の結果、いずれのカテゴリーにおいても女子の方が男子に比べて高いと評価された子どもが多く、言語的相互作用、空想/ごっこ遊び/創造的遊び、社会的遊びの複雑性の 3 つのカテゴリーに関しては、男子の方にないもしくは低いと評価された子どもが多かった。懐中電灯の場面では、自己主張とコントロール ($\chi^2(2)=8.50, p<.05$) で有意差が見られ、男子の方に低いと評価された子どもが多かった。また、ピア・オブザベーション原版に習い 13 項目の行動カテゴリー評価得点を用いて「仲間関係スキル」、「仲間への攻撃性」、「自己主張」の 3 つの得点を算出し^{脚注1)}、それらを従属変数とする t 検定を実施したところ (表 3)、女子の仲間関係スキルと自己主張の得点が有意に高かった。

全体的評価のカテゴリーでは、お絵かきボード場面において対象児とピアの人間関係 ($\chi^2(3)=16.53, p<.05$) で有意差が見られ、残差分析の結果から女子の方が男子に比べて中程度もしくはとても高いと評価された子どもが多く、男子では高いと評価された子どもが多かった。ままごと場面では、対象児の居心地 ($\chi^2(2)=6.27, p<.05$) で有意差が見られ、女子の方に高いと評価された子どもが多く、懐中電灯の場面ではコード化担当者のピアへの反応 ($\chi^2(2)=6.79, p<.05$) で有意差が見られ、男子の方に低いと評価される子どもが多かった。3 つのカテゴリーごとに全玩具場面における評価得点の平均を算出し、それらを従属変数とする t 検定を実施したが、いずれの項目にも有意差は見られなかった (表 3)。

脚注1) 仲間への攻撃性得点は、道具的攻撃、敵意のある攻撃、否定的気分の 3 つのカテゴリーについて、各玩具場面での評定得点の平均を Z 得点化して合算したものである。自己主張得点は自己主張とコントロールの評定得点から同様に算出している。仲間関係スキル得点は、まず、挑発への反応および社会的遊びの複雑性の評定が仲間と協調的な行動であった場合に 1 点、それ以外を 0 点として場面ごとに換算し、カテゴリーごとに 3 場面の合計得点を算出し、残りの行動カテゴリーの評定平均値とともに Z 得点化して合算したものである。

各観察カテゴリー評定と子どもの友だち関係との関連

つぎに、対象児のピア・オブザベーション法における評価と友だち関係との関連について検討した。解析の前に、対象児の友だち関係に性差が見られるかどうかを確認したところ、友だち数を従属変数とする t 検定の結果から性別による有意差は見られず ($t(38)=1.17, ns$)、親しい友だちの有無に関しても、 χ^2 検定の結果から有意な差は認められなかった ($\chi^2(1)=1.91, ns$)。そのため、これ以降は男女を合わせた全体数で解析することにした。各カテゴリーの評価を独立変数、友だち数を従属変数とする分散分析を実施したところ、どの玩具場面のカテゴリーにおいても有意差は見られなかった^{脚注2)}。

表2 各カテゴリの評定得点の分布: 子どもの性別および親しい友だちの有無による比較 (括弧内の値は人数, 太字部分は χ^2 検定で有意であったカテゴリを示す)

行動カテゴリー	性別	社会的行動の評価																						
		対社会的行動I			対社会的行動II			自己主張とコントロール			親密な関係													
		低い	中間	高い	低い	中間	高い	低い	中間	高い	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9				
お友達へのおもちゃの貸与	男子(%)	15.0(3)	60.0(12)	25.0(5)	15.0(3)	55.0(11)	30.0(6)	15.0(3)	80.0(16)	5.0(1)	75.0(15)	15.0(3)	5.0(1)	15.0(3)	0.0(0)	5.0(1)	0.0(0)	85.0(17)	10.0(2)	5.0(1)	95.0(19)	0.0(0)	5.0(1)	
	女子(%)	15.0(3)	35.0(7)	50.0(10)	15.0(3)	50.0(10)	35.0(7)	40.0(8)	40.0(8)	50.0(10)	10.0(2)	5.0(1)	70.0(14)	25.0(5)	55.0(11)	15.0(3)	10.0(2)	65.0(13)	45.0(9)	5.0(1)	70.0(14)	30.0(6)	0.0(0)	
友達との対話	男子(%)	30.0(6)	40.0(8)	30.0(6)	35.0(7)	45.0(9)	20.0(4)	35.0(7)	40.0(8)	25.0(5)	35.0(7)	60.0(12)	5.0(1)	10.0(2)	20.0(4)	10.0(2)	0.0(0)	50.0(10)	25.0(5)	5.0(1)	75.0(15)	15.0(3)	10.0(2)	
	女子(%)	5.0(1)	50.0(10)	45.0(9)	15.0(3)	25.0(5)	60.0(12)	35.0(7)	50.0(10)	15.0(3)	10.0(2)	50.0(10)	40.0(8)	65.0(13)	5.0(1)	10.0(2)	5.0(1)	70.0(14)	15.0(3)	5.0(1)	70.0(14)	25.0(5)	5.0(1)	
仲間内での役割	男子(%)	60.0(6)	30.0(3)	10.0(1)	60.0(6)	20.0(2)	20.0(2)	50.0(5)	30.0(3)	20.0(2)	70.0(7)	80.0(3)	0.0(0)	20.0(2)	10.0(1)	20.0(2)	30.0(3)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	70.0(7)	20.0(2)	10.0(1)
	女子(%)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	30.0(3)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	20.0(2)	10.0(1)	80.0(6)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
お友達への関わり	男子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
	女子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
お友達への関わり	男子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
	女子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
お友達への関わり	男子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
	女子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
お友達への関わり	男子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
	女子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
お友達への関わり	男子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
	女子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
お友達への関わり	男子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
	女子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
お友達への関わり	男子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
	女子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
お友達への関わり	男子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	
	女子(%)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	30.0(3)	50.0(5)	20.0(2)	50.0(5)	20.0(2)	20.0(2)	60.0(6)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	10.0(1)	0.0(0)	100.0(10)	0.0(0)	0.0(0)	90.0(9)	10.0(1)	0.0(0)	

注) 1) 物理的・攻撃的攻撃, 2) 受動的で拒絶なし, 3) 拒絶するが取られる, 4) 玩具を渡す拒絶は無し, 5) ピア・オブザベーション法を用いて玩具を渡す

注2) 1: 社会的遊びなし, 2: 単純な社会的遊び, 3: 複雑な社会的遊び, 4: 協力的な社会的ごっこ遊び, 5: 複雑な社会的ごっこ遊び

注3) 1: 協力的, 2: カの主張, 3: 社会的操作, 4: 所有権の認識, 5: 交渉, 8: 対象が玩具の一部を取らせない, 9: 協力的・社会的で課題状況にならない

つぎに、親しい友だちの有無による評定得点の比較を χ^2 検定により実施したところ(表 2)、行動カテゴリーにおいて、ままごと場面の肯定的相互作用への関与度($\chi^2(2)=6.23, p<.05$)で有意差が見られた。残差分析の結果から、親友あり群の方がなし群に比べて高いと評価された子どもが多かった。また、向社会的行動 II ($\chi^2(2)=12.06, p<.01$)でも有意差が見られ、親友あり群の方がなし群に比べて低いと評価された子どもが多く、なし群の方にないと評価された子どもが多かった。この他にも、道具的攻撃($\chi^2(2)=12.02, p<.01$)と肯定的気分($\chi^2(2)=6.25, p<.05$)の各項目で有意差が見られた。道具的攻撃に関しては、親友あり群がなし群に比べて中程度と評価された子どもが多く、なし群の方に高いと評価された子どもが多く見られ、肯定的気分では親友なし群があり群に比べて中程度と評価された子どもが多く、あり群の方に高いと評価された子どもが多かった。懐中電灯の場面では、向社会的行動 I ($\chi^2(2)=6.91, p<.05$)で親友なし群があり群に比べて中程度と評価された子どもが多く、あり群の方に高いと評価された子どもが多かった。また、向社会的行動 II ($\chi^2(2)=6.12, p<.05$)でも有意差が見られ、親友あり群がなし群に比べて高いと評価された子どもが多かった。

先述の性差と同様に、13項目の行動カテゴリーから「仲間関係スキル」、「仲間への攻撃性」、「自己主張」の3つの得点を算出し、友だち関係変数との関連について検討した。友だち数に関しては、3つの得点との相関からいずれも有意な関連は見られなかった(仲間関係スキル： $r=.01, ns$ 、仲間への攻撃性： $r=.18, ns$ 、自己主張： $r=.29, ns$)。一方、親友の有無を独立変数とする t 検定の結果から、親友あり群の方がなし群に比べて仲間関係スキル得点に有意に高かった(表 3)。

全体的評価のカテゴリーでは、お絵かきボード場面において対象児とピアの人間関係の項目($\chi^2(3)=10.00, p<.05$)で有意差が見られ、残差分析の結果から親友あり群の方がなし群に比べて高いと評価された子どもが多く、なし群では低いと評価された子どもが多かった。ままごと場面では、コード化担当者のピアへの反応($\chi^2(2)=6.71, p<.05$)で有意差が見られ、親友あり群の方がなし群に比べて高いと評価された子どもが多く、なし群では低いと評価された子どもが多かった。また、懐中電灯の場面では、対象児の居心地($\chi^2(2)=6.04, p<.05$)で有意差が見られ、親友なし群の方があり群に比べて低いと評価される子どもが多かった。3つのカテゴリーごとに全玩具場面における評価得点の平均を算出し、友だち関係変数との関連について検討した。その結果、友だち数に関してはいずれも有意な関連は見られなかったが(仲間関係スキル： $r=.01, ns$ 、仲間への攻撃性： $r=.18, ns$ 、自己主張： $r=.29, ns$)、親しい友だちの有無を独立変数とする t 検定の結果から、親友あり群の方がなし群に比べてすべての項目で有意に得点が高かった(表 3)。

脚注2) 解析結果のなかには、有意差が見られたカテゴリーもあったが(懐中電灯場面での敵意のある攻撃)、独立変数のある群の人数が1名であったので結果として提出しなかった。

表 3 全玩具場面から作成された合成得点に対する t 検定の結果：
子どもの性別および親しい友だちの有無による比較

カテゴリー算出得点	性別			親しい友だち		
	男子(n=10)	女子(n=10)	t値	あり(n=14)	なし(n=6)	t値
仲間関係スキル(Z得点)	-2.58(5.15)	2.58(5.12)	2.25*	1.60(4.96)	-3.74(5.78)	2.10*
仲間への攻撃性(Z得点)	-.09(1.70)	.09(2.81)	.18 ns.	-.61(2.06)	1.43(2.22)	1.99 ns.
自己主張(Z得点)	-.70(.75)	.70(.67)	4.41**	.07(.97)	-.17(1.14)	.63 ns.
対象児とピアの人間関係	2.40(.64)	2.83(.85)	1.29 ns.	2.93(.67)	1.89(.40)	3.51**
対象児の居心地	3.00(1.51)	3.73(1.06)	1.26 ns.	3.76(1.17)	2.44(1.29)	2.25*
コード化担当者のピアへの反応	3.00(1.22)	3.67(1.09)	1.29 ns.	3.71(1.18)	2.44(.50)	3.37**

考 察

ピア・オブザベーション法で見られた性差の特徴

本研究で実施したピア・オブザベーション法の結果、女子の方が男子に比べて向社会的行動に関わるカテゴリーで高いと評価される項目が多く、言語的相互作用や社会的な遊びで見られる複雑性など具体的な行動レベルでの女子の早発性が示された。性差の見られたカテゴリーの多くがままと場面であったことから、女子が遊び慣れていた可能性は考慮すべきであるが、3つの玩具場面における行動カテゴリーを総合して算出した得点でも、女子の方が仲間関係スキルや自己主張性が高いことが示されており、女子の方が向社会性の発達が早いということができよう。同種の報告は、保護者や保育士に子どもの様子を尋ねた調査結果（西村・小泉，2010）からも認められており、本観察法は幼児の向社会的行動の特徴の一つを適切に評価できたと考えることができる。しかし、女子の中には向社会的な行動を示す子どもが多い一方で、お絵かきボードの場面では敵意のある攻撃性を中程度に示す子どもも多かった。幼児期の自己調整方略（柏木，1988）や子どもの対人葛藤場面（作っていた物を壊される、おもちゃを取られるなど）での対処方略（山本，1999）の発達に関する知見によれば、今回の対象児が属する3～4歳頃は、自己主張行動が上昇し、葛藤場面における方略が非言語的なものから主張的なものへと移行する過渡期にあたる。そのため、社会性の発達において早熟な女子は、共有する玩具（ここではお絵かきボード）を使用したいと主張することはできるけれども、まだ方略が言語的なものへと十分に洗練されていないために、攻撃的な要素を含む行動として表出されることが多かったと解釈できるかもしれない。今後は、年中や年長児にも同種の観察を行い、年齢段階での比較から検討することが必要とされる。

子どもの友だち関係との関連

本研究の結果から、観察で得られた子どもの行動評価と有意な関連を示していたのは、子どもの友だち数ではなく親しい友だちの有無であった。総じて、親しい友だちがいる子どもの方がいない子どもに比べて仲間関係スキルが高く、全体的評価でも実験状況でのピアとの関係性が良好であった。従来の研究（Howes, 1983, Ladd & Price, 1987）からも、仲間が複数いるというばかりでなく、継続的で安定した親しい友だちが存在し、その友だちとのやりとりが、関係性スキルの発達に関わるとされている。また、山本（1995）は、幼児は対人葛藤場面において、葛藤を引き起こす相手が親しい存在であるほど自己主張する傾向が高まるという結果を報告しており、普段の生活で親しい友だちと築いてきた信頼感が自由に主張できることの基盤となることを示唆している。親しい友だちがいる幼児は、関係性が深いゆえに相手との対人葛藤を経験することも多いが、解消する経験もまた増えていき、その繰り返しのなかで良好な関係を維持するための向社会的な行動を学んでいくと予想される。今後は、親しい友だちとの普段のやりとりの情報を、担当教諭への調査や継続的な観察から収集し、親しい友だちの有無が向社会的行動の発達に影響するプロセスを検討する必要がある。

まとめと今後の課題

以上から、構造化された場面での実験観察法として開発されたピア・オブザベーション法は、幼児の向社会的行動の特徴を具体的な行動で把握できるものであり、性差の結果が従来の他の手法による研究と同様であったことから、評価法としての妥当性が一部認められたと考えることができよう。また、幼児期の向社会的行動の発達にとって重要なのは、友だちの数よりも親しい友だちの有無であることが示され、今後は、子どもが親しい友だちを形成していくプロセスや、その影響要因について検討することが求められる。

文 献

- Brownell, C., & Brown, E. (1992). Peers and play in infants and toddlers. In V. Van Hasselt & M. Hersen (Eds.), *Handbook of social development* (pp.183-200). New York:Plenum.
- Hartup, W. (1996). The company they keep: Friendships and their developmental significance. *Child Development*, 67, 1-13.
- Howes, C. (1983). Patterns of friendship. *Child Development*, 54, 1041-1053.
- 柏木恵子 (1988). 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- Ladd, G.W., & Price, J.M. (1987). Predicting children's social and school adjustment following the transition from preschool to kindergarten. *Child Development*, 58, 1168-1189.
- Maccoby, E. E., & Martin, J. A. (1983). Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In P.H. Mussen (Ed.), *Handbook of child psychology*, (vol.4, pp.1-101). New York: Wiley.
- 丸山愛子 (1999). 対人葛藤場面における幼児の社会的認知と社会的問題解決方略における発達の研究 教育心理学研究, 47, 451-461.
- 西村智子・小泉令三 (2010), 日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) の保育者評価 福岡教育大学紀要, 59, 103-109.
- Morison, P., & Masten, A. (1991). Peer reputation in middle childhood as a predictor of adaptation in adolescence: A 7-year follow-up. *Child Development*, 62, 991-1007.
- NICHD Early Child Care Research Network (2001). Child care and children's peer interaction at 24 and 36 months: The NICHD study of early child care. *Child Development*, 72, 1478-1500.
- NICHD Study of Early Child Care (1993). Phase I Instrument Document Chapter 27 Section 2 Revision. Peer Observation Manual. 全96頁.
- 関清佳・松永あけみ. (2005). 幼児の向社会的行動と自己制御機能との関連 群馬大学教育学部紀要, 人文社会学編, 54, 221-231.
- 山本愛子 (1995). 幼児の自己主張と対人関係－対人葛藤場面における仲間との親密性及び既知性－ 心理学研究, 66, 205-212.

付記：本研究は、平成21年度文部科学省科学研究費（若手 B）「少子化社会における子どもの仲間関係の発現メカニズムの解明：0歳からの縦断的検討」に関連する研究として、同年度山梨大学戦略的プロジェクトからの助成を受けて実施したものである。